
変えた黒王の伝説

ライナ・リユート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変えた黒王の伝説

【Nコード】

N6853T

【作者名】

ライナ・リユート

【あらすじ】

『この世界にも飽きたな』

主人公と友人のこの発言で神が願いを叶えてやろうと異世界へ転生することになった。

チートを貰い伝勇伝の世界へ転生だ。

主人公の最終目的、世界征服を目標に主人公は頑張ります。

チートは極力使わないようにします。

そのために黒い事をやったりします。

それでよければ見てください。

『俺はすべてを利用しつつして世界を手に入れてやる……!』

01 転生（前書き）

これは転生したオリ主の話を書きたくてやりました。
色々汚くて黒いことをしたりします。

そういう話をやりたくて作ったんですが……
興味を持っていただけでそんなはなしでもいいという方だけお進み
ください。

一話は会話が多いです。

01 転生

「んーっとここどこだ？」

周りは全体的に白で地面はない。
なぜか浮いているような感じだ。

「さっきまで屋上にいたよな？ あいつと一緒に……」

『目が覚めたようだね』

後ろから声がして、急いで後ろを振り返る。
そこには6歳から7歳くらいの少年が立っていた。

「誰だ？」

『僕？ とりあえず神と名乗っておこうかな』

「神？ 子供なのにな？」

『ははははは』

無邪気に自称神は笑う。

なにが起こっているのか分からなくて俺は戸惑った。
そこで何が起こったのか整理しようとした。

？
？
？
？

「なんかこの世界にも飽きたな……」

と、一人の少年が学校の屋上でとんでもないことを友達に言った。
その横にいた少年も、

「だな。飽きたな」

「だよねえ。ここで神様登場！『君を異世界に転生させてあげよう』という展開にならないかな」

空を見上げながらボーっとしたようすで言う。
その横で少年が、苦笑を漏らす。

「そんなことにならないから。そんなことにならないからこんなにつまらないんだろう？」

「まあそうなんけどさあ……じゃあたとえばの話でそうになったらどうする？」

俺は視線を隣に移し、聞く。

その横の少年は少し考え込むようにしてから、

「異世界に行ったらラーメン屋でもしてるよ」

「それはこの世界でもできるんじゃないか？」

笑いながら言う。

それにつられて、隣の少年も笑い、話を続ける。

「じゃあお前はどつするんだよ」

「俺は……自分がおもしろそうだと思った事をやる」

「らしいことを……まあそんなこと起こらないけどな」

そこで二人そろって溜息を吐く。

その後、顔を見合わせた。

「なあどつした？」

「そつちこそ……」

「なんかお前の姿がぼやけて見える」

「俺……も……」

その言葉を聞いた後、俺らの意識は途絶えた。

？
？
？
？

「この後だな」

俺は一人で頷いた。

自称神は首を傾げながら、

『自分がここに来る前の事？』

「何で分かった？」

『僕は神だよ？』

「そうか……小説とかでよくあるように心が読めると」

そこでまた無邪気に笑う。

そのままの顔で首を振りながら言った。

『そんな人権無視のことしないよ。考えてみただけ』

「へえ」。で、ここはどこだ」

『ここは、狭間だね。死んだ人間は一回ここにきてその後天国か地獄かもう一回他の人生を歩むかを選択する』

突然のことに言葉を失う。

あたりまえだ。突然こんなことを言われてはい、そうですかとなるわけがない。

だがこの状況がそれを認めざるを得ない状況を作り、必死に気を振り絞りながら言った。

「ということは俺は選べるわけだな？ その3つの選択肢を」

『いや、君たちは選べないよ』

「どういうことだ？ それに君達って？」

『君たちは望んだ。神が現れ異世界に転生させてくれることを。だ

から君たちは選べない。そのために僕は君たちを殺した』

「は？」

またまた言葉を失う。

俺を殺した？ どういうことだ？

それにもう一人つてのは……

『君たちが望み、僕がそれを叶えてあげよう。そういうことだ。君がここに来る前友達が隣にいただろう。その子だよ。もう一人は』

「ああ……痛ッ」

その友人の名前を思い出そうとした瞬間、激痛が走った。

ああ、そうだ。俺の名前も何だっけ？

「俺の名前はなんだ？」

『さあ、教える訳には。死んだ者は名前を奪われる。これがルール』

「じゃあ俺と一緒に死んだ、あいつは？」

『これまたルール。君達にはこれから転生する異世界を決めてもらう。だが別々にだ。だから同じ世界に行けるとは限らないよ』

「そうか……」

そこで一回黙る。

もしかしてこれはチャンスなんじゃないか？

俺は確かに望んだ。あんな世界に未練なんてない。

まあ家族とかにもろくに口聞いてなかったし……

俺はもつとおもしろい世界に行きたかった。

こんな変化のない世界なんておもしろくなかったから。

殺したと聞いてキレようかと思ったが、逆にありがたい。

よし、決めた！

『顔つきが変わったね。決めたかい？』

「ああ、俺が転生する世界は《伝説の勇者の伝説》の世界だ」

『分かった。伝説の勇者の伝説の世界だね。あそこは少し危なめの世界だから何個か特権をあげようかな』

「いいのか？」

『ほんととはこんなことないんだけど、ちょっと今僕、君の元の世界の小説にはまっちゃってね。だからやってみるのは面白いかなと思つて。ライトノベルにはよくあるだろう？ 特権』

「ははは……けどいいのか？ その特権を使って俺は大虐殺やら何をするか分らないぞ？」

『別にいいよ。どうせ僕らはそっちの世界に干渉できないし何をしてもらってもいいよ』

「お咎めはなしということだな……」

『うん』

「じゃあ忘却欠片^{ルールフラグメ}をくれ」

『どんなやつ?』

「フロワードとかが持っているようなのに似た能力で闇だけじゃなくて闇、雷、炎、水、光の力を持った獣を出せるようにしてほしい」

『ふむふむ、それで?』

「その指輪は闇と雷、光は狼みたいな獣の形で炎は不死鳥みたいな鳥で水は鮫だな。それでテレパシーみたいなので対話できるようにしてほしい。それとこの忘却欠片は俺にしか使えないようにしてくれ」

『分かった。これでいいかな?』

その神の小さな手には五つの色を持った指輪が握られていた。
その指輪を見て俺はうーんと唸る。

「まあいいんだけど……それを一つの指輪にできないかな」

『分かった』

そう言い神は指輪を手の平に持ったまま手を重ねた。
次に開いたときは一つの指輪になっていた。

「まだいいか?」

『じゃあ後、二つね』

「じゃあ身体能力の上昇。ルシルまでとは言わないから過去のエリ

「入家の当主ぐらい」

『それでいいの？ 伝勇伝のことをさっき調べたけど当主は身体能力だけで強い訳ではないよ？』

「いや、それでいい。ただの身体能力は」

『分かった。これは君が転生した後に付けておくよ』

「最後はお願いみたいなもんだけど、頭の良さをこのままにしておいてほしいってことだな」

『いいよ。まあ君は元の世界でも一番賢いぐらい頭がよかったから変わるのがいやなんだろう。最初から変えるつもりなかったからもう一個いいよ』

「じゃあ神依りの体質の物しか扱えないような忘却欠片ルールフラグメもどんなものも扱える体にしてくれ」

『？ まあいいけど……』

「じゃあ決定だな」

『じゃあ次の人生楽しんでね。後、君の指輪の事とか必要なことは頭の中に入れておくから』

神の小さな手がパンと大きな音を立てた。

すると俺は体が引つ張られるような感じがして意識が消えた。

01 転生（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

今後ともよろしく願います。

2話からはもう少しちゃんと話が進みます。

5話まで完成済みですので2話は明日更新致します。

感想やお気に入り登録をお待ちしております。

02 数か月後（前書き）

短いです。
はい。

02 数か月後

知らない天井だ……

はい、すみません。ネタに走りました。

知ってる天井です。俺が生まれた家の天井です。

まあとにかく俺が転生されてもう数ヶ月。

俺はごく普通の男の子として親の元で育っている。

いや、普通じゃないって？ 生後数か月でこれだけ理解してたらすごいって？

まあ神に頭の良さを変えないでと言ったら頭の中は全く変わっていませんでした。

ということで精神年齢は一六歳ほど。まあ精神年齢は俺が一六ぐらいになるまで上がることも下がることもないだろう。

この状況の中俺を現すに相応しい言葉はこれだ。

『見た目は子供、頭脳は大人。その名はクロノ』

名乗り遅れたが俺の名前はクロノというらしい。

苗字は知らん。親にクロノって呼ばれたから知っているだけだ。神に貰った特権はどうしたかだって？ 身体能力は図りようがない。

指輪は鎖で首からかけて持っている。

なんか母親から生まれた時から指輪を握っていて母親と父親が、

「すごい！ 神のイタズラか！？ そうだとしたらこの子はすごいことになるぞ！」

なんて親バカ発言をして指輪を鎖に通し、俺の首にかけたらしい。そして今の状況から察するに、親は貴族だ。

今寝ているベッドはすごく豪華だし、そこから見える天井は白くきれいだ。

ベビーシッターも何人かいるし、なんか凄い好都合だ。

俺が伝勇伝の世界に転生させてもらったのには訳がある。

おもしろそうだから……と言う理由と原作読んどるときこの世界に居たらやってみたいことがあったんだよね。

まあめっちゃ黒いことしますけど。

そのためには情報が必要だ。

だから貴族と言うのは情報を集めたりするのも好都合だった。

まあこの体では何もできないが……

今は計画を練る時だ……

自分が動けるようになって、すぐに行動できるように。

今はここでおとなしくする。

だから動けるようになったらすぐにでも行動を開始しよう。

俺はこの世界を……

……変えてやる。

02 数か月後（後書き）

これから数話は話が短いです。

まあ赤ん坊の時は書くことはありませんね。

次話は2歳です。

話が動き始めるのはクロノが5歳になってからです。

これぐらいで次回予告は終わっておいて、

クロノは1歳にもなっていないのにすごいこと言ってますね。

まあ理由等はまた書いていきますが。

それと三話は明日の6月1日（水）の午前6時に予約掲載したので
よろしく願います。

お気に入り登録、感想待ってます。

03 2歳（前書き）

2歳です。

大きく話は動きませんのでそこをご了承ください。
次話、動きます。

03 2歳

二歳になった。

俺は喋れるようになり、歩けるようになった。

二歳では少し、つてか早いが喋れるようになってる。

その時、貴族の親バカはなんて言うか。

それは、

「天才だ。この子は天才だよ母さん」

「ええ。そうね」

という事だ。

もちろん演技はしている。

流暢に喋ればおかしすぎるので少し舌足らずのような感じで喋っている。

親は予想通り貴族だ。だがあまり階級は高くない。

階級の高い貴族や王に媚を売り、ニコニコ笑ってこの生活をしている。

それに俺は、

「反吐が出る……」

と小さく呟いた。

すると横にいた母さんが、

「どうかした？ クロノ」

「どーもしないよー。かあさま」

と急いで取り繕う。

だが本当に嫌気がさしていた。

人間はいつもこうだ……

上の人間にニコニコ笑い、媚を売る。

まあそうする理由は分かる。

そうしないと会社などの社会では生きれないからだ。

上司にため口。

すぐにクビだ。

先輩にため口で偉そうに言う。

いじめの対象になるだろう。

だから笑顔で媚を売る。

それは分かるが嫌だ。

自分の本音を素直にいえないう世界なんて嫌すぎる。

だから俺は……………

「そうそう、クロナ。あなたこの間この街の図書館へママと行った
でしょう？ その館長さんがあなたのことを気に入ったって。い
つでもいらっしゃい、だつてさ」

「ホント——？ じゃあいまからいつてきていいーい？」

「いいわよ。けど一人で大丈夫？」

「だいじょうぶ。すぐ近くだし」

「なら行ってらっしゃい」

「うん」

そう言いクロノはニヤツと笑う。

計画通り――

そう思う。これは計画のひとつ。

情報を手に入れるためには図書館などのコネが必要だ。

貴族だから人を使えばいいという意見もあるだろうが、俺は子供だ。

そんなことできるはずない。

ということだ。魔法とかの知識はそういうところで手に入れる
しかない。

だからこそ、少し大きな図書館を仕切っている館長に好かれるよ
うに行動した。

それだけのこと。

そしてクロノは母親に手を振り、家を出た。

ローランドは治安の悪い所だが気にすることはない。

その辺の人間が襲ってきててもクロノは十分対処できるからだ。

今は制御しているがかなり身体能力が高い。

たぶん体がついて来ていないだけで、数年後にはもっと高くなる
だろう。

それに指輪がある。

クロノは首から下げている指輪を握りしめた。

「こいつは極力使わないようにしないと……」

そう呟きながら、足を進める。

図書館に行って、その後からやることは魔法の勉強だ。

「前の世界には魔法なんてなかったからなあ。かなり楽しみだ」

そう楽しそうに呟き、軽い足取りで向かった。

03 2歳（後書き）

次話ついにクロノ5歳。

話が動き始めます。

5歳なのにクロノがめっちゃ黒いことです。
では。

4話は今日の午後6時か明日の午前6時に更新します。

04 スタートライン(前書き)

今回は少し黒いです。

04 スタートライン

「計画は整った。やっとスタートラインだ」

そう自分の住む、貴族の館で窓の外を見ながら呟いた。
時間は夜。電気を付けていないので部屋は暗い。

彼を照らすのは月の光のみ。

夜の暗い闇に浮かぶ大きな丸い月を見上げながらクロノは呟く。

「もう俺は五歳になった。だがここでスタートライン。やっと始まる」

クロノは楽しげに笑う。

クロノの右手の指には、神から貰った指輪が鈍い光を放っている。
これは月の光を受けて、反射しているのだろうがクロノには、
この指輪も始まりを喜んでいるような気がしていた。

「さあやろうか」

クロノは右手を掲げる。

その指にはまる指輪を眺めた後、言う。

「闇よ有れ！」

そう言いながら腕を振るう。

すると、黒い狼に似た姿をした獣が五匹生まれる。

その影の獣たちはクロノの前に立ち、クロノの様子を伺っていた。

「これが俺の武器か……いや仲間だな。よろしく頼む」

『ご主人様。よろしく』

頭の中に声が響く。

その声が響いた瞬間、影の獣が頭をあげたのでこいつらの声だとすぐに分かった。

「ご主人様だなんてよそよそしい。クロノでいいよ。お前たちは仲間であり、友達なんだから」

そう言った瞬間、影の獣が全員頭をあげる。

それに指輪も光った。

「そうだ。まだだしてないけどお前たちもよろしくな」

クロノは指輪にも語りかける。

そして指輪を撫でてやる。

それに反応するように指輪も五色の色に順番に光る。

「そうだ。お前たちに聞いておきたい。俺と一緒に来れば汚いこともするかも知れない。何が起こるか分からないが一緒に来てくれるか？」

『もちろん。私たちはクロノと一緒にだ』

また頭に声が響く。

それにクロナはニッコリとほほ笑む。

「じゃあいきなりで悪いが初仕事だ。行くぞ」

そう言いクロノはドアの方へ向かって歩き出す。

影の獣はクロノを囲むように付いてきた。

クロノはドアを開ける。

そして廊下を進む。

廊下も暗い。ろうそく一本とないからだ。

それでも仲間で友達の影たちは見えた。

クロノは足を進める。

向かうところは寝室だ。両親の眠る寝室。

そしてそのドアの前にたどり着く。

すると中から声が聞こえた。

しかし、それを聞く必要はない。

クロノは影の獣たちに声をかけた。

「初仕事からかなり汚い仕事で悪いが、今回の目的は両親の暗殺だ。いけるか？」

『大丈夫だ、問題ない』

その返答にまたニコリとほほ笑い、ドアをノックする。

「母様。父様。失礼します」

そう言いドアを開ける。

そして中に入る。

すると両親が目に入る。姿は想像してくれ……

両親は俺の姿を見ると真っ青になった。

正確には足元を見てだが。

そこには影の獣が居る。

それをみて真っ青な両親を見ながら言う。

「母様、父様。今まで育てて頂きありがとうございました。とても感謝しています。だからあなた達はこれ以上汚れないように、狂わないようにしましょう」

そう言いぺこりとお辞儀をする。

両親は案の定俺が何を言っているのか理解できないみたいな顔で見ている。

だがそれに興味はない。

「俺はこの世界を浄化してやる。狂った世界を正してやろう。だからあなた達も……消えろ！」

そう言った瞬間、五匹の獣が動いた。

両親の眼は恐怖で見開き、声も出ない様子だ。

そして逃げようとする。

だがその前に影の獣に喉をかみ切られ、絶命した。

その様子を見てクロノは少し笑う。

「ははは。世界を浄化する……か。中々おもしろそうだしやりがいがありそうだ……それにこの世界に來た時から世界が狂っているのは感じていたしな」

そう言い両親の死体に背を向ける。

影の獣を指輪に戻し、ドアの方へと歩く。

「これでスタートは切った。じゃあ計画は次の段階へ」

そう言い自分の部屋に戻り、あらかじめ用意していた服を着る。それは平民の恰好。それも孤児に見えるようなみすばらしい。

「では主人公へお目にかかりましょうか」

そして笑みを浮かべ、窓を開けて家を飛び出した。
そして庭を走った。

その彼を照らすのは満月の光だった。

04 スタートライン（後書き）

5話の更新はいつになるか分かりません。
もう少し書きだめてから出します。

お気に入り登録、感想待ってます。

05 ジェルメ・クレイスロール訓練施設（前書き）

お久しぶりです。

更新遅れてすみませんでした。

05 ジェルメ・クレイスロール訓練施設

ジェルメ・クレイスロール訓練施設。

ここはジェルメ・クレイスロールが訓練を行い、育てている場所。そしてその弟子には『伝説の勇者の伝説の主人公』ライナ・リュート。

後の『蒼の公主』ピア・ヴァーリエ。

その幹部になる、ペリア・ペルーラがここで訓練を受けているはずだ。

「ここだな……」

クロノはそれだけ呟くと、辺りを伺った。

周りには誰もいない。

クロノはジェルメ・クレイスロール訓練施設の前に気絶しているように横たわった。

「これでジェルメ本人か中の誰かに見つけてもらっただけだな……」

？
？
？
？

「君！？ 大丈夫かい？」

男の声。

声から察するに大した実力を持っていないだろう。

あきらかに動揺していて、愚かさを感じさせる声だ。だがクロノは疲れ切った顔で、声で言う。

「どなたですか……」

「それより君、大丈夫か。とりあえず中へ」

そう言いジェルメ・クレイスロール訓練施設の門を開ける。

そしてクロノを担ぎ、中へ入れた。

そしてベッドに寝かせられた。

その後、何人かの人間が集まってきた。

この施設で働いているだろう大人と、ジェルメ。

それに眠そうな顔をした少年、おそらくライナと、

青い髪の少女、おそらくピアと。

金の髪でニコニコと笑っているおそらくペリアが居た。

その中でジェルメが口を開いた。

「君、何者だい？ 何があつた？」

「両親から虐待を受けて……それで逃げてきました」

そして腕についた傷を見せつける。

それはクロノがここに来る前に付けたものだった。

「それで親は？」

「いなくなっていました。それで数日歩き回っておそらくこの前で力尽きてしまったようです」

クロナは下を向いて言った。

それにピアが女王様気質全開で言った。

「なにこいつ、下を向いてなんか弱そうな奴。キモ」

「ピア」

ペリアがピアをなだめるように言う。
それにピアは、

「事実じゃない」

と言う。

ジェルメはそんな弟子たちの会話は無視していった。

「なんで虐待された？」

その問いにクロノは内心ニヤツと笑う。

予想通りの問い。

これは貰ったな。

クロノは言葉を詰まらせるように言いくそくに口を開いた。

「ぼ、僕が異常だからって……」

「異常？」

「はい。生まれて一年で流暢に言葉をしゃべったり、力が強かったりしたんです」

その答えにジェルメはすぐにここで働いているであろう同僚とみられる人物を手招きして小声で何か呟いた。

すると男は敬礼をして、部屋を出て行った。

どうやら部下みたいな物らしい。

ジェルメはそしてこう言った。

「君の戦闘能力を見せてもらいたいんだが大丈夫かい？」

「なぜ……ですか」

「君は捨てられたのなら、これからどこかの施設に連れて行かれるだろう。そしてここはジェルメ・クレイスロール訓練施設。君に実力や才能があればここでこれからここで暮らすことになる。だからその実力や才能があるか見させて貰いたいと思ってね」

「そう……ですか。まあ親のいない僕には生きる道が少ないですね」

「よく分かってるじゃない。じゃあライナ。あなたが相手しなさい」

ジェルメが突然名前を呼んで、ライナはびっくりしたような顔で首をブンブン振りながら、

「嫌だよ」

「へえ」。この私にそんなこと……」

ジェルメが言う前にライナは腰を90度に折って謝りだした。

「すみません。お相手させて頂きます。だからこれ以上は……」

ジェルメがニヤツと笑う。

ライナの反応を楽しむかのように……

あ、この人ドSだ。

ライナ、何されたんだ？

正直嫌になつてきた……

だが……

そこでジェルメが言う。

「じゃあいいわ。外に出なさい」

そう言われてクロノはベッドから立ち上がる。

ライナも部屋から出た。

その後が続いてクロノも部屋から出て外に出た。

そして外に出た後、クロノとライナはにらみ合った。

ピアたちは興味なさそうに見ていた。

「始め」

ジェルメの掛け声と共にライナが迫つてきた。

まだ訓練を始めたばかりだと思つて少し油断していたが、かなり早い。

それに動きもかなりキレがあつた。

クロノはそういう分析はできるが戦闘は前世の時からなにもやっていなかったのでできない。

「だからこそ……」

俺は神に身体能力を良くしてもらつたのだ。

この部分は心の中で言う。

それにここに入るためには戦闘能力が高くないといけなかったし好都合だった。

そしてジェルメと言う人物は凄い人物なんだと思う。

ライナがここに入って数週間した時を狙ってきたのだがその期間でここまでの人物を作り出した。

だからクロノはここに来ることを選んだ。

戦闘の仕方など、そういうのを学ぶために。

これはクロノの最終目的へたどり着くためにも必要なことだった。そしてクロノはライナの攻撃を躲し、カウンターをする。

何の訓練もしていない、ただ身体能力が高いただけの人間が放つ攻撃。

それはスピードや威力はあるが他は全然だめだという事だ。

それが当たるわけもなく、ライナは躲した。

ライナも攻撃するが、高い身体能力の前に攻撃が当たるわけもなく。

二人は攻撃して躲される。攻撃されて躲すの繰り返しだった。

それが数十分も続き、ジェルメに止められた。

「終わりよ」

それで二人共ピタツと止まった。

息をハアハアと荒くし、睨みあった。

「君、中々やるね。これで君はこの訓練生だ。わたしの事はジェルメでも師匠でもなんとでも呼べばいいが、言う事は聞けよ」

「分かりました」

「それで君の名は？」

「クロノです。苗字は分かりません」

それは嘘だった。

だが、これを言ってしまうと貴族だとばれてしまう可能性があったので言わなかった。

クロノは貴族としてはありえない、黒髪として生まれたが、指輪を持って生まれたことからこれも神のイタズラとして片づけられていた。

黒髪なので貴族とは思われないだろう。

「クロノか。分かった」

ジェルメは部下の男に何か伝えるとどこかへ行ってしまった。
するとライナが近寄ってきた。

「君、強いんだねえ。僕はライナ。よろしくね、クロノ」

「私はピア。あんた弱そうだと思ったけど強いのね。良かったわね、私の奴隷にしてあげる」

「奴隷ってピア……僕はペリア。よろしくクロノ」

ピアとペリアが近づいてきて自己紹介をした。
それに答えてクロノも、

「よろしく、ライナ、ピア、ペリア」

ニヤツと笑いながら手を差し出した。

条件はクリアした……

さあ次のステップへ行こうか。

05 ジェルメ・クレイスロール訓練施設（後書き）

訓練の様子とか、書いても何か微妙なので2・3話書いて次に移ろうと思っっているのですがどうでしょう？

あまりに時間が飛びすぎになると思っ、やるかずっと迷ってた。

時間があまり進まなくなるのは18歳くらいだと思うのですが、その間どうしようか迷ってます。

少し考えたいのでまた遅れるかも知れません。

06イレギュラー（前書き）

少し短いですが更新。

06 イレギュラー

「あなた、中々筋は良いわね」

クロノがここに来てから約半年、ジェルメから褒められるほどクロノは成長していた。

「ありがとうございます。ですがまだまだです」

「その通りよ。まだまだ弱い」

そしてクロノはまた訓練を開始する。

しかし、クロノはちらちらと、少し離れた所で訓練を行っている男を見ていた。

ジェルメが少し離れた後、クロノは呟く。

「奴は何者だ！？ 俺と同じ、イレギュラー……」

そう、この訓練施設には知らない奴が混じっていた。

もちろんこの施設にも子供は結構いた。

居たと言ってももうほとんど死んだ。まあそれも領けるぐらい、訓練は厳しく、睡眠時間15分と言う状況だから死んでもおかしくないだろう。

今ここで生き残り、訓練を受けるものは優秀だという事。

それは原作の知識内で分かっていた事。

それは、ライナとピア、ペリアだ。そこに俺が入り、当初の計画では4人のはずだった。

だが、一人イレギュラーが居る。

そいつはかなり強い。ここで生き残るぐらいだ。

もちろんライナやピア、ペリアには勝てないがこの訓練の内に死んでしまうような奴ではないだろう。

なぜなら身体能力のチートが無かったら俺でさえ負けていただろうから。

そいつはクロノがこの施設に入ってから数週間後に入ってきた。

そいつは俺達より短い訓練の中でそこその力を手に入れている。間違いなく優秀だろう。

名前はリディアと言う名前だ。

「奴は俺のイレギュラー要因になりえる男だな」

そう思い、観察、注意を怠らない。

それとは別で、悩む要素が1つ。

そいつはクロノの後ろからやってきた。

「ねえ、速く私の物になりなさいよ」

ピアだった。

なぜかピアは俺にしつこく近寄ってきて『私の物になりなさい』など言っ、て、勧誘してくる。

もう、ローランドを出ようと考えているみたいだ。

今俺が立てている計画。一応何があってもいいようにと何個か考えてある。

ここで適応されるのは、ここで分かれるルートは二つ。

1つはピアたちとローランドを出す。

2つ目は、ローランド王立軍事施設に入るまで、ローランドで過ごす。

どちらを選ぶべきか……。

そしてピアが俺を誘っているので、恋敵が増えたようにペリアが睨んでる。

全く持っていない迷惑だ。

まあ睨まれてはいるものの、ピアの事以外に関してはペリアと仲がいい。

そんな事は置いておくか。

俺のこの施設での目的は3つだった。

まずは自分を鍛える事。

ライナ達と同じ訓練を受けてかなり強くなっておきたい。

この世界での強さはかなり重要だからな。

それに睡眠時間15分という、過酷な訓練を続ければ睡眠時間が短くても対処できるようになるしな。

2つ目は、ライナ達と会っておくこと。

ライナ達に会っておくことはこれまた重要な事だからだ。

そしてその器を確かめて、利用するに値するか、計画の邪魔にならないかを図る。

3つ目、これは俺の精神面を鍛える事。

両親を殺した、その夜。少し吐き気がして寝れなかった。

殺した直後は大丈夫でもそれから夜は少しきつかった。

今はもう大丈夫だけど、精神面を鍛えるのは来れも重要だから。

そう、当初の予定ではこれだけだった。

イレギュラー、リディアを調べるとというのが予定に組み込まれた。

奴は何者なんだ……？

06イレギュラー（後書き）

オリキャラです。

このキャラは今考えている所では敵にはなりません。味方にするかも迷ってますが。

感想待ってます。

07 主従（前書き）

お久しぶりです。

ほったらかしにして申し訳ございません。

忘れてない？ この小説の事。

すみません。俺の責任です。

しかし、よければお気に入り登録を止めるなんてことせずに忘れて
たらもう一回読んでほしいです。時間そんなにかからないから。
お願いします。

では7話

07 主従

イレギュラーな存在。リディア。

奴は転生者だという線が強くなった。

クロノは力を蓄える事に専念し、リディアの動向に目を光らせつつ、過ごしていた。

しかし、ある日の訓練でライナが放った稲光^{いづち}。それは確かにリディアにあたった。しかし奴は右手をあげ、稲光^{いづち}に触れた。

瞬間、弾けたように消える稲光^{いづち}。

そんな能力、この世界にはない。クロノが入ったことによるただのイレギュラーかとその時クロノは思っていた。

しかし、あきらかにリディアもクロノの事を警戒し、監視していた。

クロノのことをイレギュラーと感じられる奴がまともなわけがない。つまり転生者って訳。

問題は神様に会って、特典を貰っているか、どんなものを貰っているのか。これだ。

だから、クロノは警戒している風を全く見せず、リディアに近づく。

「リディア。君はこれからどうするかとか決めてるかい？」

「どうするか？」

「俺が来てからもう一年くらいだろ？ お前が来てからも一年くらい。で、生きていけるだけの力をついた。でさあ、これからどう生きるのか決めてる？ っていう話」

「……………クロノは決めているのかい？」

「さあ？ 先に教えてくれたら教えてもいいよ」

「はぁ。お前はそういう奴だよな。俺はな、店か屋台をやりたいと思っっている」

「なんの？」

「あゝ。ラーメンっていうやつだ」

リディアがその言葉を言った瞬間、衝撃が走る。

ポーカーフェイスは保ったままだが、ビクリした。

そしてリディアがクロノを試しているのも分かる。

ラーメンなんてこの世界にはないからだ。それが分かるという事を気づかれるとまずい。

……ん？ 待てよ？

ラーメンの屋台をやりたい？

これで転生者というのは確定したが……。何かが引っ掛かる。クロノは前世の記憶を必死にたどる。

ポーカーフェイスを保ったまま、数十秒黙り込む。考える。

そして……。見つけた。

前世の記憶で最も新しい奴。

転生させられる前、屋上で親友と話していた時の記憶。

『ここで神様登場！』『君を異世界に転生させてあげよう』という展開にならないかな』

クロノの前世が言う。

『そんなことにならないから。そんなことにならないからこんなにつまらないんだろう？』

前世の親友が言う。

『まあそうなんだけどさあ……じゃあたえばの話でそうになったらどうする？』

そしてこの次。その親友はなんて言った？

『異世界に行ったらラーメン屋でもしてるよ』

あいつは確かにそう言った。

クロノはそれを思い出し、ポーカーフェイスが崩れた。

「どうした？ クロノ？」

少し疑うような顔でリディアが言う。

それにクロノは鎌をかけてみることにする。

「俺は……自分がおもしろそうだと思った事をやる」

そう言った瞬間、リディアの顔がゆがむ。
そしてリディアが言う。

「お前……まさか」

「そっちこそ」

いつも会った時にやっていた、手をパンパンってやるやつ。アニメに触発されてやりはじめたアレをやった。

「「相棒？」」

そう言っただけ顔を合わせて喜び合う。

「お前、ラーメン屋やりたいなら違う世界へ行けよ」

クロノは笑いながら言う。
すると、リディアも笑って。

「ほら、ラーメンが無い世界へ行ったらラーメンを普及させてやろう
と思ったんだよ。お前こそこの世界で何やろうと思って決めたんだ
？」

「俺は、そうだな……。英雄になってやろうかってな」

「英雄？ シオンがいるじゃねえかよ」

「ははは。まあこの世界を救ってやろうと思うんだ。」

理不尽から、不条理から世界を救ってやろうと思うんだ。

それってさー、とてつもなく時間が掛かって、とんでもなく面倒でだるいけど、やりがいのある楽しいことだって思わないか？」

「確かに、お前らしいな。けど、それってきれいごとじゃ無理だぞ」

「分かってるよ。俺の計画は……とてつもなく犠牲を出すことにな
ってるよ。そのために俺は両親を手に欠けたし」

「……？　そうか、お前の覚悟は本物なんだな」

「ああ。俺はなにをしてもどんな犠牲を出しても、これから生ま
れてくる、孫やひ孫やそのまた子孫たちが幸せになる事を信じて、
俺が殺す、世界の為に犠牲になる命より、はるかにたくさんの方が
救われることを信じて、世界を救ってやるよ」

「なんか最後はレファルのセリフっぽかったけどいい夢だな。

よし、俺も力を貸してやる。俺がラーメン屋をやりやすい世界を
創るために。」

俺はお前の部下だ。主従関係だ。よろしくな、王」

「いいのか？」

「ああ」

「じゃあ、お前の力、使わせてもらっぞ」

「分かったよ。王」

「王は止める。後々王になるかも知れんが王ではない。お前はクロ

ノでいいよ」

「そうだな。クロノ。じゃあいつちょやりますか」

「ああ。長い道のりになるがやるぞ」

「「世界の為に」「」

二人はがっちりと握手をした。

07 主従（後書き）

リディアは一話のあの人だったんですね。
……分かった人もいるかと思うけど。

じゃあ次回予告。

次話はローランド出奔かな？

それが、もう出奔した後から始めるか。

お気に入り登録と感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6853t/>

変えた黒王の伝説

2011年12月21日16時46分発行